



『自己意識の現象学』新田義弘編/世界思想社

「生き生きした現在と述語的経験」佐藤幸三 P.198～P.208

東洋大学大学院で、新田先生のゼミを9年間聴講しました。

事務室を通さず個人的に直接、しかも唐突に先生に申し込んだもので、受け入れてくださったのは先生のまったくのご好意によるもの。

ゼミの基本はフッサールの原書購読でしたが、

あるとき、ゼミで、参加者による研究発表が企画され、

私には、「生きた現在」を主題とする意識の問題への言及が命じられました。

以後、それは、私の研究の主要なテーマの一つともなりました。

ゲーテは『ファウスト』のなかで、「時間よ、止まれ。お前はあまりにも

美しいから」とファウストに語らせていますが、そもそもの問いは

時間が流れているということです。時間は現実には流れているのでしょうか。

考えてみれば、すべての動詞に共通する本質である「ある」の实在を証明することが難しいのと同じように時間が流れているということを物理的に証明することは不可能のように思われます。アインシュタインはそれを「光」に還元することによって試みたようですが、それすら実は意識のなかの記憶と予期によって感じられていることにすぎません。私たちは、普通、時計を見て時間が過ぎたことを知り、周りの物が変化したことに気づくことによって時間が流れたということを知ります。現在のものが変化した結果であることを知ることは、それと意識のなかで保存されている記憶を比較しているからにすぎません。すなわち、時間の流れは意識のうちの出来事ではないのです。

眼前で起きている現象を意識のうちにおける現象として捉え、そして、その(対象の)現象について、現在見えているものと、現在は見えていない裏面などについての過去の経験(記憶)を総合して当該の対象を全体として構成するというのが(後期)現象学の基本的な方法論です。

「ある」ということがすべて意識の現象であるとするなら、「ある」ことの現実性はどのように証明される

のでしょうか。フッサールはそれを自我が「今」生き生きと捉えていることのうちに求めます。しかし、時間は止まることはないので、自我が「今起きたこと」に気づいたときには、その現象はすでに過去のものとなってしまうのです。つまり、「今」は永遠にどこまでも自我によっては把握できないものとしてあるのです。いつも過去を振りかえって、反省している自我には現在をヴィヴィドには捉えられない。それが大方のフッサール研究者のフッサール解釈であると思われます。この時間における限界状況を乗り越える方法はあるのでしょうか。

自我が能動的に過去を振り返り、反省しているから現在は現在のものとして捉えられない。であるとすれば、自我が自らを働かせる以前に、すなわち「無我」の状態では現象を捉えることができず、現在を現在として捉えることができるということになります。フッサールはそうした理論を「受動的総合の分析」として言及しました。すなわち、自我が対象に志向的に向き合う以前に、自我が関与していない領域ですすでに「受動的な」志向性が働いているというのです。

ある研究者は、その段階においてはまったく「自我」は欠落しているので、「今」において感覚素材は総合されると説きます。総合されるものは、過去に経験され記憶され、そのときは忘れ去られてしまっているものとヒュレーと呼ばれる実質的な感覚素材です。私が不思議に思うのは、フッサールがヒュレーを端的に感覚素材としてそれ自体を問わないことです。ヒュレーとはあらかじめ把握によって生成されたものであり、はじめから意味づけられているものです。あまつさえ、フッサールはヒュレーという概念の創設によって感覚というぼやけた多義語とともにわき出てくる混同をスッキリさせることができると述べています。私たち Erwachsene は世界のなかで生活しているとき、「まったく新規なもの」と出会うことがあり、それを感覚したとき、それは何かと問い、いぶかうものです。そこに、フッサールが語るように「世界は意味として語られてくる」というような把握をする余裕があるはずもありません。身体で新たに感覚したものを、今経験したものとして、今どのように把握するのか、それが私の学についてのそもそもその素朴な疑問です。アドルノはフッサール現象学において感覚と把握との関係が明瞭になっていないと批判しますが、ヒュレーはもともと主観的なものとして性格づけられた所与なのです。

ハイデガーは現象が現象する始源を「自我」より es を最初に置くことによって明らかにしようとした。しかし、それは不十分で、今、感覚、把握という間に生じるジレンマは、無に徹する仏教思想、またその展開である西田哲学によってのみ乗り越えられるというのが、私がこの小論で述べたかったことです。

プラトンはソクラテスに会って、めまいを覚えたと言ったようですが、私にとってのそのような存在が新田先生でした。

Das "Sein" ist nur im Bewusstsein. Der Fluss der Zeit ist auch. Wir kennen die Flüssigkeit durch den Vergleich des Gedächtnisses. Als ich etwas bemerke, ist es schon weg. Wir reflektieren und wissen nachträglich wie es ist. So können wir die Gegenwart als die wirkliche Gegenwart nicht erfassen. Das kommt von dem Sein des reflektierenden Ich hervor. So, wenn es kein Ich gibt, oder das Ich etwas vor seinem Tun weiß, kann das Ich die wirkliche Gegenwart erfassen. In der Phänomenologie Husserls gibt es den Begriff "die passive Synthesis, und ein Forscher sagt, es kein Ich in dieser Region gibt. Vor

der Teilnahme des Ich wird die Synthesis von Hyle und der leeren Vorstellung des Gedächtnisses gemacht, sagt er..Die Empfindung von Phaenomenologie Husserls heisst Hyle.Mein Wunder ist.....

Die Hyle ist nicht die wirkliche Empfindung.Husserl sagte,Hyle subjektiv und das einmal Werdendes ist. Wie Adorno sagte,Husserl die Verhaeltnis zwischen die Erfassung und die wirkliche Empfindung nicht erklart hat.So koennen wir die Gegenwart durch Phaenomenologie nicht erhassen.Die Moeglichkeit der Erfassung der Gegenwarthabe ich nach dem Buddihismus und der Philosophie Nishidas gesucht.